

〈原著〉

志賀高原における肢体不自由児を主たる対象とした スキーキャンプの実践

白 神 晃 子

The ski camp practice mainly for physically handicapped children in Shiga-kogen Highlands.
Akiko Shiraga Innovative Research & Liaison Organization, Shinshu University 6-Ro, Nishi-nagano,
Nagano 380-8544, Japan. E-mail: shiraga@shinshu-u.ac.jp *Bulletin of the Institute of Nature Educa-*
tion in Shiga Heights, Shinshu University 54: 1-6 (2017).

This article is on the national ski camp that has been practiced by the self-help organization A for 37 years in Shiga-kogen Highlands to find its history and background, purpose, members and roles, programs, and characteristics. The operation way and programs of the camp have been modified through trial and error along with their experiences and times, resulting in the current form of programs employing the role-sharing style. It is remarkable that there is a diversity of participants and supporters, that it is run by the parties and their direct concerned persons, and that it has been continued for a long time. On the other hand, there are challenges that how they'd develop their activity as a public interest, that how they'd handle with participants other than physically-handicapped such as intellectually handicapped, and that how they'd resolve their financial problem.

Keywords : Physical Disability, Outdoor Education, Self-Help Group, Integrated Camp

要旨

本稿では、志賀高原で37年にわたり実践されてきたA自助団体の全国スキーキャンプについて、歴史的経緯、実施目的、構成員と役割、プログラム、特徴を明らかにした。スキーキャンプは実践経験と時代に合わせて運営方法やプログラムが変遷し、試行錯誤の結果、現在のプログラムや役割分担が形成された。本実践の特筆すべき意義は、多様な参加者・支援者がいること、当事者および直接的つながりをもつ関係者によって運営されていること、長期にわたって継続されていることにある。また、今後の課題として、公益的な活動としての発展、知的障害などの肢体不自由以外の障害種別の参加者、資金的課題に対応していくことが求められていた。

はじめに

A自助団体では、志賀高原スキー場をフィールドに、主に肢体不自由の子どもたちを対象とした全国スキーキャンプを実践してきた。このスキーキャンプは2016年までの37年にわたる実践の中で、障害児

キャンプや障害児者スキーレクリエーションに関するノウハウを蓄積してきたとともに、自助団体の障害児のみならず多様な参加者を巻き込み、また多様なステークホルダーを輩出してきた。筆者は2007年より実行委員としてスキーキャンプに関わっている。外部からの支援を受けない自助活動でありながら、長年にわたり全国的な活動を継続してきた本実践に学ぶ点が多い。一方で、本実践では近年知的障害を中心に、A自助団体が対象としていない障害種別の参加者受け入れが増えるなど、変化が生じている。

障害児キャンプ活動の効果は、特に家族支援の文脈で確認されている。林ら(2000)によると、キャンプへの保護者の参加目的は情報収集や相談、他の両親と知り合いになる、家族でキャンプを楽しむ、の3点に大別される。吃音児を対象にした治療的キャンプでは、子どもの50%、保護者の80%の考えや行動が変化した(伊藤, 2010)。鴻上ら(2000)は、子どもの自主性・主体性が養われ、保護者のレスパイトの機会になることを指摘した。一方、発達障害児キャンプの母親への効果を実証的に明らかにした今泉ら(2013)では、気分の即時的改善は見られたものの、睡眠の質が改善されなかった群では気分の長期的改善がみられなかったことから、キャンプの効果が限定的であることを指摘している。

また、数少ない障害当事者が運営主体となったキ

キャンプの効果として、小西（2000）が、同じ障害をもつ人のエンパワメントにつながったことを事例から示している。

夏季キャンプの実践に比べて、冬季キャンプの実践は報告が少ない。多田・針ヶ谷（2011）は、ろう児を対象にした冬季野外教育プログラムの実践を報告している。冬季活動の特徴として、雪を用いて創造的活動ができること、視覚優位の聴覚障害児にとって視界の開けた冬の森は観察しやすいこと、課題として安全対策や安全管理、手話や筆談によるコミュニケーションがとりにくいことが挙げられた。障害児にとっては、とりわけ冬の野外活動は実施までの心理的・実務的ハードルが高いと考えられる。

本稿では、A自助団体のスキーキャンプ実践を対象として、自助団体に残された記録と関係者の証言をもとに、歴史的経緯、実施目的、構成員と役割、プログラム、特徴を明らかにし、その実践の意義と今日的課題を示すことを目的とした。

スキーキャンプの歴史的経緯

スキーキャンプは自助団体が設立した5年後の1980年に開始された。きっかけは、1979年の機関紙に長野県在住の会員が「長野の財産は自然、それに雪の頃もいいですよ。家族でスキーをやりに来ませんか。」と掲載したことにある（先天性四肢障害児父母の会、1995）。第1回から第37回までの開催地、参加者数、うち指導員数とボランティア数をTable 1にまとめた。

スキーキャンプは2016年までに37回を数えるが、このうち1990年（第11回）は雪不足、2011年（第32回）は東日本大震災の影響で中止とされた。開催地は、最初の10年間は北志賀竜王、次の10年間は志賀高原高天ヶ原を中心に複数のスキー場での開催が試みられているが、2001年（第22回）以降は志賀高原一ノ瀬を会場として継続している。この理由として、グレンデの条件と、志賀高原索道協会やガイド組合、宿泊先ホテルの障害児スキーキャンプへの理解と協力が得られたことが大きいと考えられる。

参加者は、開始当初は自助団体の会員家族が中心であり、サリドマイド被害者団体とその支援者らがボランティアとして参加した。1984年（第5回）以降は参加者枠として「ボランティア」と「指導員」の記録があり、キャンプの実施体制がおおよそ整備されていたと考えられる。第7回頃からは、ボランティアは自助団体の障害をもつ当事者やそのきょうだいと友人が中心となった。

Table 1 スキーキャンプの開催履歴

開催回	開催年	開催地	参加者数	指導員 うち	ンウ ティボ アラ
1回	1980	北志賀竜王	45		
2回	1981	北志賀竜王	99		
3回	1982	国設戸狩	135	記録なし	記録なし
4回	1983	北志賀竜王	169		
5回	1984	ヤナバ国際	122	※10	※10
6回	1985	拇池高原	124	※20	※20
7回	1986	国設戸狩	192	※15	※6
8回	1987	北志賀竜王	98	15	17
9回	1988	北志賀竜王	98	19	22
10回	1989	北志賀竜王	124	17	20
11回	1990	国設戸狩	雪不足のため中止		
12回	1991	志賀高原一ノ瀬	122	19	27
13回	1992	志賀高原高天ヶ原	105	18	21
14回	1993	志賀高原高天ヶ原	132	25	25
15回	1994	志賀高原発喃	117	27	18
16回	1995	志賀高原高天ヶ原	92	22	13
17回	1996	志賀高原高天ヶ原	90	24	8
18回	1997	志賀高原高天ヶ原	86	24	15
19回	1998	志賀高原高天ヶ原	127	25	11
20回	1999	志賀高原高天ヶ原	113	23	15
21回	2000	菅平高原	114	24	13
22回	2001	志賀高原一ノ瀬	164	28	12
23回	2002	志賀高原一ノ瀬	130	28	15
24回	2003	志賀高原一ノ瀬	134	28	22
25回	2004	志賀高原一ノ瀬	137	28	19
26回	2005	志賀高原一ノ瀬	132	28	20
27回	2006	志賀高原一ノ瀬	133	31	19
28回	2007	志賀高原一ノ瀬	126	27	22
29回	2008	志賀高原一ノ瀬	115	25	24
30回	2009	志賀高原一ノ瀬	123	35	18
31回	2010	志賀高原一ノ瀬	111	24	17
32回	2011	志賀高原一ノ瀬	東日本大震災のため中止		
33回	2012	志賀高原一ノ瀬	100	23	20
34回	2013	志賀高原一ノ瀬	107	29	21
35回	2014	志賀高原一ノ瀬	123	29	32
36回	2015	志賀高原一ノ瀬	109	33	19
37回	2016	志賀高原一ノ瀬	124	34	19

※ 5～7回は正確な人数は記録されていない

競技種目は、スキー班と幼児対象のソリ班が中心となるが、ウィンタースポーツの多様化を反映して2002年（第23回）からはスノーボード班、2008年（第29回）からはスノーシュー班がおかれた。

スキーキャンプの方向性は、開始当初から現在に至るまで、関係者間で議論が重ねられてきた記録が残されている。自助団体の機関紙に掲載された「スキー実行委員会報告」（竹ノ谷、1985）には、議論の結果が掲載されている。ここでは、当該スキーキャンプと他のキャンプとの違いとして3つの柱、すなわち「親の交流、スキー教室、子どもキャンプが

Table 2 スキーキャンプの理念をめぐる

-
- 1) スキーキャンプの場をどうとらえていけばよいのか。
 - ア) 親と子がスキーを楽しむ場
 - イ) めったに会えない父母の会の親同士の交流の場
 - ウ) 子どもにスキーを教える場であり子どもが雪をとおして自然に触れる場
 - エ) 子どもキャンプをとおして子どもが親から離れ、ボランティアとともに生活キャンプをし、自立的な生活態度を養う場
 - オ) ボランティア、賛助会員が「障害児」と父母の会のことを知るための場
 - カ) 父母の会の運動の中でボランティアの若者を育てる場
 - 2) スキーキャンプの3本柱の設定
 - ア) 親同士の交流
 - イ) スキー教室
 - ウ) 子どもの生活キャンプ
-

(先天性四肢障害児父母の会, 1995より抜粋)

同時に存在していること」が挙げられている。また、自助団体の20周年記念誌に掲載された「スキーキャンプの理念をめぐる」(先天性四肢障害児父母の会, 1995)には、現在の「スキーキャンプの柱」につながる理念が示されている (Table 2)。

このような理念に関する議論に加えて、細かな運営方法やプログラムについての議論も重ねられてきた。現在のプログラムや役割分担は、実践で明らかになった課題や時代に合わせて修正され、試行錯誤の結果形成されたものである。そのため、現在実施されているプログラムや役割分担について示すことは、本実践の成果の一端を示すことにつながる。次に、2016年に実施されたスキーキャンプの目的、プログラム、参加者とその役割について述べる。

スキーキャンプ実践の目的

スキーキャンプ実践の目的に該当すると考えられる「スキーキャンプの3つの柱」として「1. スキーを通して自然を学ぶ, 2. 子どもたちとボランティアとの共同キャンプ, 3. 親同士が交流し子どもを忘れて楽しむ」がある。後述するプログラムとの対応は、それぞれ1. スキースクール, 2. 生活キャンプ, 3. 大人交流会である。

本キャンプは、自助活動としての性格が強く、子どもだけでなくボランティアや親も対象として明示されている。また障害児に対してよく行われる「療育キャンプ」とは異なり、スキーを楽しむ、生活力、友人関係、自主性や社会性を養う目的で行われる「教育キャンプ」(藤沢, 2005)に位置づけられる。

主な構成員とその役割

スキーキャンプは自助団体の内部組織であるスキーキャンプ実行委員会によって運営されている。スキーキャンプの参加者は、実行委員、指導員、ボラ

ンティア、子ども参加者、大人参加者に分けられる。また、実行委員長とスキースクール校長、ボランティア長が各1名おかれる。それぞれの役割について述べる。

実行委員：障害児の親や障害当事者である自助団体会員および会に賛同する賛助会員で組織される。自助団体事務局員の協力を得て、反省会を含めて例年4回程度の実行委員会が開催され、現地視察、キャンプの円滑な運営と安全確保を担う。

指導員：スキーとスノーボードの技術指導およびゲレンデでの誘導を行う。指導員はいずれも障害者指導の専門家ではなく、日常的に指導者として活動している者も少ない。そのため、障害者スキーの専門指導員1名が、指導員向けの講習会と、障害が重い参加者のスキー指導を担当している。

ボランティア：高校生と大学生を中心に構成される。子ども参加者が高校生以降にボランティアになることが多い。生活班での生活支援、子ども向けレクリエーションの企画・実行を担う。

子ども参加者：乳幼児から中学生までを指す。このうち小学生以上が生活班に所属する。主に障害のある当事者、そのきょうだいと友人である。

大人参加者：指導員以外の成人参加者を指す。主に自助団体会員である障害児の親と、ボランティアを卒業した障害当事者である。

スキーキャンプのプログラム

スキーキャンプのプログラムは、主にスキースクール(スキー班)と生活キャンプ(生活班)で構成される。スキー班と生活班はそれぞれ年齢、性別、スキーまたはスノーボード技術に応じて分けられる。活動は志賀高原の自然環境と、団体向け宿泊施設の設備を活かした内容となっている。Table 3に、スキーキャンプ期間のスケジュールを示した。

Table 3 スキーキャンプ期間のスケジュール

0 日目	
NT	バス大阪便出発、 車中レク 、車中泊
1 日目	
AM	バス大阪便到着 バス東京便出発、 車中レク 昼食、自由行動
PM	バス東京便到着 受付、用具合わせ、子どもの引渡し 子ども雪上レク 、指導員講習会
NT	夕食、入浴 スキースクール開校式 指導員打合せ 子ども就寝 ボランティア打合せ、実行委員打合せ
2 日目	
AM	起床、朝食 スキースクール① 昼食・休憩 指導員打ち合わせ
PM	スキースクール②
NT	夕食 子ども交流会 指導員打合せ 子ども就寝 ボランティア打合せ、実行委員打合せ 大人交流会
3 日目	
AM	起床、朝食 スキースクール③ スキースクール閉校式 昼食・休憩
PM	自由行動、チェックアウト バス大阪便出発、バス東京便出発
NT	バス大阪便到着、バス東京便到着 解散

網掛はスキースクールの活動

太字は主なレクリエーション

スキースクール（スキー班）：スキーおよびスノーボード技能のレベルに応じて分けられたスキー班毎に、複数の指導員が配置される。指導員は介助も含むことから、各班の性別構成に配慮している。スキー班ではボランティアは子どもと離れ、スキーやスノーボードを楽しむ。思春期青年期のボランティアにとって、仲間との交流の機会となっている。1日目の開校式では、参加者全員が自己紹介を行う。自己紹介はアイスブレイクとともに、全員のコミットメントを高める効果がある。2日目は午前と午後、3日目は午前にスキースクールが行われ、レベルに応じてゲレンデ内を自由に滑走する。滑走コースは

実行委員のアドバイスに基づき、指導員が選択する。半日ごとに指導員反省会が開かれ、情報共有と、生徒の達成度に応じたメンバー変更が行われる。3日目の閉校式では、指導員から生徒全員に技能レベルを示したバッジが手渡される。成果物を示すことで、スキースクールに対する達成感向上と、次回キャンプへの動機付けを図る。

生活キャンプ（生活班）：各部屋に3人程度配置されるボランティアとともに、子どもは5～8人程度の男女別の生活班に分かれ、大人と離れて寝食をともにする。ボランティアは子どもの障害特性や健康上の注意点について把握し、必要な支援を行う。障害のあるボランティアを子どもが手助けすることもあり、さまざまな世代の障害児者が参加するキャンプの独自性を見ることができる。

バス車中レクリエーション（0，1日目）：参加者の多い大阪と東京から、大型バスを借り上げている。この車中では、ボランティアが企画したレクリエーションが行われ、アイスブレイクと子どもを退屈させないための工夫がなされている。

子ども雪上レク（1日目）：スキースクールへの導入としてボランティアが企画実施する。子どもが雪に親しみ、スキーブーツ等の用具に慣れ、緊張をほぐすことを目的とし、ゲーム性の高い内容である。

子ども交流会（2日目）：ボランティアが企画実施し、屋内のホールで実施されるレクリエーションである。参加者の障害や年齢を考慮し、全員が参加できるよう工夫されたゲーム性の高い内容である。

大人交流会（2日目）：指導員と大人参加者の自己紹介に続いて、自由な交流が促される。プログラムの中で、唯一障害について公に語られる場でもある。

スキーキャンプ実践の特徴と意義

スキーキャンプの成果として、子どもとボランティアのスキー・スノーボード技能や社会性の向上、達成感や仲間関係の醸成などがある。その他、特徴的な成果として以下が挙げられる。

統合キャンプ：統合キャンプは、特に障害のない参加者の障害に対する気づきと理解を促すこと（吉野，2003；伊佐地ら，2003），メンバー同士の相互作用を高めること（小山，1986）が示されている。本実践には、子どもやボランティアにも障害のない者が半数近く含まれる。さらに本実践では、大人にとっての統合キャンプであるという特徴がある。障害関係者のみならず一般のスキー・スノーボード愛

好者が指導員として重要な役割を担っており、いわば口コミで広まった指導員には障害者との接点が多かった者も多い。彼らが障害のある子どもを指導し、継続的参加によって子どもの成長を実感し、親や障害当事者と交流する経験は、障害への理解促進につながっている。こうした統合キャンプにおける仲間関係は、障害者を支える新たなリソースとなりうる。

成長モデルとなるボランティアや大人の存在：子ども参加者の感想文には、高校・大学生のボランティアへの憧れが毎年のように記載されている。スキーキャンプに参加する障害児者の年代は幅広く、若い親や障害のある子どもは、キャンプ中に年長の当事者の活躍や仲間関係を目の当たりにする。先天性四肢障害児が日常生活で同様の障害者と出会うことは稀であり、年長者のこうした姿は、障害児のロールモデルとなりうる。生活を共にすることで、当事者や障害児の親が深く話し合うことができるのも、意義の1つである。

居場所や地域への愛着の形成：長期にわたる実践の成果は、参加した子どもの進路選択、次世代の参加、居場所機能に現れている。参加した子どもたちは教育や福祉の分野に進むことが多い。同様の成果は、「手足の不自由な子どものキャンプ」の約50年にわたる実践の成果にも挙げられている（飯笹、2007）。特にスキーキャンプ以外で障害者との関わることがなかった子どもにとって、統合型のスキーキャンプはキャリア形成にも影響を与えたと考えられる。また、参加が複数回になると、「帰ってきた」といった表現で志賀高原への愛着が語られるようになる。長期にわたり同じ地域でキャンプを開催することが、参加者の居場所形成にも貢献したと考えられる。二宮（2014）は、保護者主体の障害児キャンプが地域の新たな資源となり、インクルーシブな地域づくりにつながる可能性を示した。地域外住民による実践ではあるが、本キャンプにも同様の効果が期待される。その理由として、長期実践によって、索道協会やホテルなどの受け入れ地域側が、障害児スキーキャンプへの理解を深めていることが挙げられる。

実践における今日的課題

以上、スキーキャンプ実践の特徴と意義を述べたが、今日的な課題も見られる。1つは上位団体の財政難から補助金支出が困難になっており、実施にかかる費用が年々高騰していることによる資金的課題である。2つめは、近年四肢障害以外の障害種別の

受け入れ打診が増えていることである。具体的には、知的障害、発達障害等であり、本実践が評価されると同時に、これまで対象としていなかった参加者の受け入れ要請が増える可能性がある。3つめは、公益的な活動への発展である。本キャンプは40年近い継続の中でノウハウを有していることから、社会的な文脈を考慮すれば、活動の公益性を視野に入れる時期であろう。

以上3点の課題は、参加者を広げ、公益性を高めることで資金的課題をクリアするという対応関係にある。一方、こうした今日的課題への現実的な対応として公益性を高めるという考え方は、この活動が自助活動であるという点と相容れない部分がある。その意味では、このスキーキャンプは転換点にあり、今後のスキーキャンプのあり方をめぐって、議論が展開されていくだろう。

まとめ

本稿では、A自助団体の全国スキーキャンプ実践について、歴史的経緯、現在の実施目的、構成員と役割、プログラム、特徴を明らかにした。スキーキャンプは実践経験と時代に合わせて運営方法やプログラムが変遷し、試行錯誤の結果、現在のプログラムや役割分担が形成された。本実践で特筆すべき意義は、多様な参加者・支援者がいること、当事者および直接的つながりをもつ関係者によって運営されていること、長期にわたって継続されていることにある。また、今後の課題として、公益的な活動への発展、肢体不自由以外の障害者の受け入れ、資金的課題に対応することが求められている。

今後は本実践で培われた四肢障害児へのスキー指導法や、スキーキャンプが参加者に及ぼす影響等を明らかにすることが求められる。

謝辞

先天性四肢障害児父母の会 事務局およびスキーキャンプ実行委員会には本稿の資料収集と事実確認にあたりご協力いただきました。付して感謝申し上げます。

参考資料

スキーキャンプ30周年記念文集編集委員会編（2009）先天性四肢障害児父母の会スキーキャンプ30周年記念文集、先天性四肢障害児父母の会
先天性四肢障害児父母の会・スキーキャンプ実行委員会とボランティアグループ（2016）第37回スキー

キャンプのしおり

引用文献

- 藤沢勝好 (2005) いきいきキャンプの子ども達—障害のある子のための野外活動のすすめ. 学文社, 東京
- 林 直美・石川容子・新井隆俊ほか (2000) 障害児療育キャンプに参加した両親へのアンケート調査について. 地域環境保健福祉研究 4: 56-58.
- 飯笹義彦 (2007) 列島縦断ネットワークキング<東京>「手足の不自由な子どものキャンプ」の50年. ノーマライゼーション 27: 56-58
- 今泉奈津季・岡戸奈津子・小澤有希ほか (2013) キャンプを用いた発達障害児の家族支援(2)保護者の心理的効果とそれに関連する生活習慣. 発達障害研究: 日本発達障害学会機関誌 35: 341-147.
- 伊佐地隆・大仲功一・根本哲弘ほか (2003) 中学校行事のスキー宿泊学習を脊損生徒とともに経験した生徒の意識変化. リハビリテーションスポーツ 22: 68-73
- 伊藤伸二 (2010) 吃音親子サマーキャンプにみる, グループの力. コミュニケーション障害学 27: 26-31.
- 小西治子 (2000) 障害者がエンパワーメントされるための権利擁護の事例—フレンドシップキャンプ2000から—. 発達人間学論叢 4: 91-102.
- 鴻上 繁・沖 貞明・山本晴康ほか (2000) 愛媛県における肢体不自由児療育キャンプの実施状況と参加児の保護者に対する意識調査. リハビリテーション医学: 日本リハビリテーション医学会誌 37: 1132-1133
- 小山 隆 (1986) 障害児と健常児の統合キャンプの意義に関する一考察. 社会福祉学 27: 147-169.
- 二宮信一・服部健治・小淵 隆ほか (2014) 障害のある子ども及びその「きょうだい」支援のための地域資源の創出の意義: 標津町サロンときわ「サマーキャンプ」の実践から. へき地教育研究 69: 51-59.
- 先天性四肢障害児父母の会 (1995) 父母の会の20年. 会報第7号.
- 多田 聡・針ヶ谷雅子 (2011) ろう児を対象にした冬期野外教育プログラム. 明治大学教養論集: 81-103.
- 竹ノ谷美朝子 (1985) スキー実行委員会報告. 父母の会通信 101: 8.
- 吉野好孝 (2003) みどりキャンプ—障害のある子どもと障害のない子どもの共同キャンプ. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 3: 97-108